



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学での私の教育的取組みの内容と理念：アイヌ的な要素が沢山ある環境の中の先住民族教育学，異文化間理解教育，質的研究法
Author(s)	ゲーマン, ジェフ
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 127, 77-90
Issue Date	2016-12-20
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.127.77
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64079
Type	departmental bulletin paper
File Information	009-1882-1669-127-1.pdf



北海道大学での私の教育的取組みの内容と理念

－アイヌ的な要素が沢山ある環境の中の先住民族教育学，
異文化間理解教育，質的研究法－

ジェフ ゲーマン*

【目次】

はじめに

1. 先住民族学 (Indigenous Studies) の由来
2. 先住民族の高等教育の特徴
3. 日本の先住民族政策とアイヌ民族のための高等教育
4. 私の教育的実践の内容
5. 課題，結び

【キーワード】先住民族（教育）学，先住民族の高等教育，日本の先住民族政策，
アイヌ民族のための高等教育，教育実践

はじめに

私の研究室に電話がかかる。「ジェフ！今度のアイヌイベントに車で連れて行って欲しいから，迎えに来て！」「遺骨のことどうすんの？まいったか？」

北大が所蔵しているアイヌ民族の遺骨の関連で北海道大学を相手取っているアイヌ民族の年配の方からだ。遺骨の収集方法が倫理に反していたと感じていたことから，遺骨関連のシンポジウムを二つ主催した筆者がいつの間にか非常に親しくしてもらい，このようにたまに物事を頼まれるようになった。けれど，このような依頼や要求は彼からだけではなく，他のアイヌの方から色々と頼まれることがある。教室を利用させて欲しいというお願い。英文原稿をチェックして欲しい。集会で話をして欲しい。構内で行われるアイヌ語の弁論大会に車で行くので，駐車はどうしたら良いか教えて欲しい。宣伝に協力して欲しい。札幌へ行ったときに車がないから，札幌から目的地まで乗せて欲しい。海外講師の通訳をして欲しい。札幌に来たから一緒にのみに行こう，等々。アイヌ民族の「勉強」（研究）に従事するようになってから13年が経つ筆者が北海道大学に赴任してから日常茶飯事となったアイヌ民族からのリクエストで，北海道大学での私の生活にアイヌ的な要素がたくさん入り込んでいる。毎日のように，北海道大学とアイヌの人々の生活が切り離せない関係にあり，境界線がないことを思い知らされるわけである。おそらく他の教員のところにこのような要求はいかないと思う。アイヌの人々は私が力になりたいということを分かっているからだ。私は喜んで付き合うのには実は，私の教育理念に深い関わりがある¹。教員として，私はこのような環境を学生たちと共有しないわけにはい

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
DOI: 10.14943/b.edu.127.77

かない。私自身は大学周辺のマイノリティと接する機会を多く提供していただきながら研究を続けてきた。このような双方向的交流が上手くいく場合、マイノリティに対する異文化間理解につながり、彼・彼女らに対する支援につながり、エンパワメントにつながる。いうまでもないことだが、マイノリティへのエンパワメントにより、北海道社会、ひいては日本社会、全世界にとってプラスにつながる。

本稿では北海道大学における筆者の近年の先住民族学や異文化間理解に関する教育の実践やエピソードを紹介する。この過程で、筆者が北海道大学に赴任するまでに身につけてきた教育理念を説明することになる。世界史における先住民族の特別な存在が彼・彼女らに対する教育を含め「先住民族の人権」が必要であることを前提としていることの説明である。なお、特にアイヌ民族のように、異なる言語、宗教観、社会構造を持っている人々を相手にすることになるので、先住民族に対する異文化間理解教育や先住民族を対象に質的研究に従事する研究者養成（院生教育）の学生たちや院生たちは、私の研究室を含めた大学構内がなるべく人種的、社会的、階級的に多様性にあふれた環境になるように努めている。というのは、私が教育を受けたアラスカ大学フェアバンクス校では大学と地域社会の境界線をなるべくなくし、異文化環境をまじかに体験できる環境が作られていた。論考を進めるにあたってそこで経験した事例を交えながら述べたい。言い換えれば、「先住民族教育・研究」の概念をもとにアラスカ大学の教育・研究環境そのものが変容を遂げている様子の説明を通して、筆者の北海道大学での教育（研究）実践のあり方と理念を説明する。

筆者は日本在住のアメリカ人で、3年半前から北海道大学の教育学院で准教授をつとめている。それまでは5年の社会人経験の後、大阪教育大学において小学校教員養成課程で学士号、アラスカ大学比較文化研究所（Center for Cross-Cultural Studies）で修士号、そして九州大学で博士号（教育人類学）を取得するために長年大学と大学院生活を送っていた。またその中、大阪では被差別部落の人々や在日韓国朝鮮人、アラスカでは多様なアラスカ先住民、その後アイヌ民族に密接に接する機会に恵まれた。アラスカ大学に在籍していた2004年から本格的なフィールド調査を開始し、主に平取町と鶴川町を対象とした。また、2006年に九州大学に進学した後、調査を再開するとともに、帯広と阿寒を調査地に加えた。2004年～2009年の間には計20か月、調査のために北海道に住んだ。

1. 先住民族学（Indigenous Studies）の由来

「アイヌ民族は日本国家の単なるエスニックグループである」という、時々見聞きする誤解を解くために、しばし世界史を遡らなければならない。先住民族学や先住民族に関する異文化間理解教育の関連でいえば、近代史を特徴づけた資本主義や産業経済は一つの共通する邪な欲望により、世界の自然資源の乱獲を行い、多くの場合、その資源を生活の糧にする地域の先住民族の生活や社会に、不可逆なダメージを与えてきた。現在の先住民族を正しく理解するためには、この「植民地責任」に対する国の賠償義務として先住民族特有の先住民族の権利の確立²、また教育の分野における適応の課題を理解するためには言語、信仰、価値観の違いから生じる文化的要因の配慮の必要³がある。

国連では今日先住民族の定義をあえて各先住民族の自己定義に委ねているが、先住民族をこの近代化の過程に位置づけるために、国連で採択された「国連先住民族権利宣言」の序文を引用しよう。「植民地化とその土地、領域および資源の奪取の結果、歴史的な不正義に苦しんできた」。つまり、先住民族とは、近代化以降植民地化政策や同化政策により、自分の土地、資源、固有の言語や文化を否定され、奪われてきた人々である。同じ近代化により発達した交通により、自らの意思で異国での暮らしを選択し移住の道を進む移民とは違う。また、植民地化政策当初に異文化との接触・対立により、急激な生活変化を迫られたという意味で、昨今注目を浴びている難民との共通点が多いが、自らの土地で本来の資源を利用しながら伝統的な生活を維持・発展する民族の自己決定の権利を有していることや、先住民族の言語がしばしば危機に瀕しているという点では大きく異なる。

近代化において先住民族が異文化間の軋轢を最も重大に被る場所が教育である。そもそもの言語の違いに加えて、遊牧や移住の生活から、学校教育が必要とする定住生活のために強制的に定住化される等、季節の変化に伴って適応していた生活から、町の中で生計を立てる必要性等から、移動をしないことを前提とした新しい経済システムへの適応で苦労したり、安定的な経済的基盤を築くことの困難を経験するわけである。学校教育の伝統において外部者である彼・彼女らは、そこで成功するために必要とされる、ブルデューのいう「文化資本」や「社会資本」がないために、子どもが教室で不利な立場に立たされるのも当然の帰結である。

さて、そのような歴史を背負っている先住民族であるが、20世紀初期をはじめに、また戦争の行き過ぎに対し発生した戦後の人権運動や、1960年代の公民権運動から多大な刺激を受け、民族的権利の回復のために法的、政治的運動を展開するようになる。高等教育において、アメリカの先住民族（ネイティブ・アメリカン、アラスカ・ネイティブ、ネイティブ・ハワイアン）、カナダ（ファスト・ネーション、イヌイト）、ニュージーランド・アオテアロア（マオリ）、オーストラリア（アボリジニ）、グリーンランド（イヌイト）と北欧（サーミ）のそれは様々な形で、固有の取り組みを勝ち取り、発展させてきている。このような教育的取組みの内容を本稿で先住民族学と呼ぶこととし、また主に先住民族による、先住民族のための、先住民族の高等教育を先住民族高等教育と称する。

いうまでもないが、現在も絶え間ない調整が必要とされる。先住民族の土着の知に基づいた文化継承の課題は、教育との関連において、次の四つのポイントに集約されよう（McGovern: 2000）。1）主流社会との接触以前の、先住民族の固有知識・言語に基づいた文化伝承に関して、どの先住民族にもその自然・社会的環境に適した文化集団の維持のために行われた教育・文化伝承の形式が存在した。2）植民地化や国家成立の過程において、学校教育に代表されるような制度により、その伝統的な知・言語は否定され、あるいはしばしば衰退させられた。3）しかし、現在のグローバル主流社会に生きていくため、そして主流社会の人々に先住民族の存在やニーズを訴えるため、「現代の知」も必要であり、今日の先住民族の多くは近代的学校教育も望んでいる。4）そこで、自分たちの固有の言語や知識体系を守りつつ、近代の学校教育との関係をいかに調整し、二つの知識体系の間に適合性をもたせられるかが課題である。これについては次項で扱う。

2. 先住民族の高等教育の特徴

この節ではアラスカ大学での筆者の体験を交えながら、先住民族学の先駆者であるバーンハートによる理論的枠組みおよび実践例の紹介を通じて、海外の高等教育における先住民族学の特徴を述べることにしよう。アラスカ大学が位置するフェアバンクスでの先住民族の古老との出会いの話から始まる。

1990年から継続的に日本に居住してきた筆者は、2004年～2005年にかけて計20か月、自分の生まれ故郷米国アラスカ州のフェアバンクスに位置するアラスカ大学フェアバンクス校に先住民族教育学を学ぶために帰国した。入学した春学期の教育学部のある授業の課題のため、地元の先住民族学校（チャータースクール）を訪問することになったが、そこで学校の名付け親であるH氏⁴を訪ねるよう勧められたことが私の本格的な先住民族の勉強の始まりであった。それ以降19か月間の間に、ことあるごとに私はH氏が住んでいたタナナ川の中の離れ小島に通い、時々、訳の分からないからかいも受けながら、雪かき、薪割、定置網漁の手伝い、車の運転、燻製小屋の修理等と様々な体験をさせられ、実生活を経験しながらH氏の特徴ある「ネイティブイングリッシュ」を通じてアラスカのアサバスカン民族の伝統的な価値観について色々と教わったのである。時々私の性格をずばっと捉えたかのように鋭く個人的な教訓も交えながら、人の生き方や社会のあるべき姿を幅広く教えてくれた。紙面の関係でこれ以上私の興味深い学びの経験については深入りができないが、特筆すべきなのはH氏という一人のアサバスカン民族の古老がアラスカ大学の教職員に大事な教育的人材とされており、このように彼の知恵を授かり、恩を受けたのは筆者の私一人ではなく、実は多くの学生・大学院生もまたそうだった。卒業間際に知ったことであるが、H氏は大学の教員達の依頼により心理学科で講師をつとめたり、ネイティブ出身の学生たちに対する伝統的な価値観の指導やカウンセリングも行っていたということである。

H氏のように地元の先住民族の伝統的な価値観・知識体系・コミュニケーション様式が、アラスカ大学の教育的活動に持ち込まれることは何も例外的なことではない。実はこれらの要素が部局の構成、授業のカリキュラム、人事構成、学生支援サービス等と、多方面に行き渡って反映されている。後で見るように、筆者が北海道大学で実現させようとしていることと深い関連性があるので、ここで事例を紹介しながら論を進めよう。

1992年の時点での世界の先住民族の高等教育の取組みをレビューしその特徴を抽出したバーンハート（1992）によれば、アラスカ大学の現在のアラスカネイティブスタディーズ・地域開発学院（School of Alaska Native Studies and Rural Development=SANSRD）の原型となった多くのプログラムや事業は、アラスカ先住民の経済的・政治的イニシアティブが元となっている。当時他の二つのカレッジといくつかのプロフェッショナルスクールに加わったSANSRDは比較教育学、福祉や地域開発学と、複数の専攻から構成されている学部・修士・博士課程の教育・研究組織である。

この事実から見るだけでアラスカ大学が多くの先住民族出身の学生を卒業させていることは驚きに値しないが、実はSANSRDはそれと同じほど重要なブリッジング（村の高校と大学をつなげる架け橋）という役割も果たしている。つまり、社会的・自然的環境が非常に異なるブッシュの村から、初めてフェアバンクスに引っ越す学生たちの適応プロセスを緩和させるために、「村」出身の学生専用の談話室やコンピューター室、何人かの先住民族出身のカウンセ

ラー、H氏のような専属の古老等、他の多くの専門スタッフを配置している。また、「村」出身の優秀な高校生が高校3年生の夏や4年生の夏に大学で何週間も泊まり、普通の大学の授業が受けられるRural Alaska Honors Instituteの事務局も同じ部局にも存在している。そのためか、SANSRDの建物が「村」出身の学生のたまり場ともなっている。そこで気兼ねなく、周りの人の目を気にせずに自分のままでいられるようである。例えば、筆者がアイヌ民族の若者の興味関心に対するヒントとなると思い、二年間アラスカ大学の先住民族出身の伝統的舞踊をする学生たちのダンスサークル「イヌ・ユピアクダンサーズ」にお邪魔をさせていただいたが、踊りの練習に赤ん坊をよく連れてきた20代前半のユピク族の女子学生のことを懐かしく思い出す。

SANSRDは研究の応用面やそれが教育に還元されるところで実際に地域と大学をつなげるという形で、地域のニーズにに応じている。けれども、それだけではなく、快適な大学生活環境を提供することにより、村の若者の大学進学率・卒業率に貢献している。これらの機能を通じてみると、後述するバーンハートによるリストのいくつもの特徴をカバーしている。ちなみに、もう一つの事例を参考のために挙げると、似たような機能を果たしているブリティッシュコロンビア大学の学生支援センター「ロングハウス」は次のようなサービスや場所を提供している（Barnhardt 1992: n.p.）。

- ・ 大きな集会や祝賀のためのグレートホール（大ホール）
- ・ 古老のためのホール
- ・ スピリットホール
- ・ 図書館・資料室
- ・ 生きた文化を実践するための多目的室
- ・ ネイティブ学生組合の事務室
- ・ セミナー部屋
- ・ 文書館
- ・ 大学が所蔵する全ての先住民族のための各プログラムのためのオフィス
- ・ 学生と教員のための談話室
- ・ 託児所
- ・ 台所
- ・ コンピューター屋
- ・ 売店

筆者が2015年3月にロングハウスを訪れ案内してもらった時に、印象に残ったのは家族や氏族全員が集まり伝統的な集会を包容するほどの設備の充実さ、伝統的な建築法で建てられたヒノキづくりの建築物から漂っていたなんともいえない素晴らしい香りだった。案内人のアーチバルド教授によると、その素晴らしさのあまり、大学の上層部までがイベントのために借りることがあるということだった。

一方で、この25年間のアラスカ大学は2010年の学際的先住民族学の博士課程（Interdisciplinary Degree in Indigenous Studies）の開設を頂点に、先住民族学の大幅な展開を見てきた。筆者が2004～05年で学んでいた比較文化の修士課程（Master of Arts in Cross-Cultural Studies）は教員や大学院生の民族的構成や、コースワークにおける先住民族の視点の徹底に、言及すべきである。後述するバーンハートによる先住民族の高等教育の特徴

の一つに、地域と大学の境界線の曖昧さや地域参加型研究が挙げられている。先住民族の伝統的な知識を調査記録する専門家を養成することを目的としたこの専門は両点において現れている。たとえば、入学資格として学生たちに求められるのは、調査において先住民族の世界観に共感でき、その核たる文化・知識の伝承者である古老と協力しながら調査作業を進められるかであり、ホームページの募集要項にこの条件は太字の注意書きとして明確に書かれている。筆者が在籍していた当時は先住民族が教員の8割と学生の9割を占めていた。難度の高い授業として特に院生たちの間で噂となっていたのは、地域で「大長老」とされていた82歳の女性と元人権活動家によってそれぞれ指導されていた授業であった。

西洋列強の植民地、またその他の国では宗主国の同化政策を正当化するための社会科学的な研究に対抗するために、先住民族出身の学者たちの中でもっとも名の知られている著書である、マオリの女性学者L.スミス（1997）による『脱植民地化の方法論』が元人権活動家のV先生の授業「土着の知を記録する」(Documenting Indigenous Knowledge) で使われていたことは無意味ではない。つまり、学生各自が自分の土着の知の記録実践プロジェクトを進めながら、毎週、本の一章を読み、授業で自分の調査経験との関連を学生たちが話し合うという授業の進め方は地域参加型の基礎であり、すなわち、地域のニーズを最優先させる、という教訓を学生たちに身に付けさせることが目的である。「協力は、ネイティブが指定した役割を非先住民が行った時に初めて利益的である」(Trask 2000: 21) という言葉の精神を実際の先住民族の地域を対象とした研究を通じて、体得させようとしている訳で、またそれにより先住民族の高等教育機関が使命として挙げている地元の文化・言葉・知識の維持と経済的基盤の強化という二つの目標を優先するのである。

カークネスとバーンハート（1991）が指摘するように、先住民族の高等教育機関で学ぶ学生の多くは地域への愛着も強いいため、単なる資格の取得を目指しているのではなく、卒業・修了後に地域に戻り地域共同体で貢献したいと思っている。また、L.スミスも言及しているように、研究が十分な事前相談の上に行われ、コミュニティの承諾を得られた上で実行し、コミュニティの価値観やコミュニケーションスタイルを尊重し、コミュニティの礼儀・プロトコルに従った場合、それはしばしばコミュニティの構成員の誇りとなる。その意味で、筆者の経験も含め述べると、フィールド調査が上手くいく学生はコミュニティの視点を最優先し、コミュニティ自体が自ら問題解決ができるように、自分の研究成果をコミュニティに還元することを常に考えているのであって、しばしば先住民族の共同体で現在でも大切にされているサービス精神が実行できる学生である。

このようにして、アラスカ大学の教育・研究の取組みは、バーンハートが挙げている以下の先住民族の高等教育の特徴に適合していることが理解できよう。

1. Commitment to Community
2. Integration of Functions
3. Sustained Local Leadership
4. Participation of Elders
5. Spiritual Harmony
6. Use of Local Language
7. Traditional Ways of Knowing
8. Traditional Teaching Practices

9. Congenial Environment

10. Participatory Research

つまり、1) 外部の認定機関や他大学・研究者からの評価ではなく、固有の文化・言語・知識を維持発展させることを最優先事項としている地域のニーズとともに、それを実現させるための地域開発へのコミットはアラスカ大学のSANSRDのような組織に見られる。

2) このため、既存の学問的領域にとらわれることなく、学際的な研究や応用的な研究が多くみられる。

3) しかし、このように認定機関や有名な大学が基準とするような条件に屈することなく、地域の文化的事項を優先するには、伝統文化に根を下ろした、長期的なビジョンへの確信と力強いリーダーシップが要求される。

4) カリキュラム等、プログラムの総体的な事柄に関しアドバイスを与えるとともに、慣れない環境で迷う学生たちに力強い精神的支えとなり、相談に乗れるのは、伝統的世界観の伝承者であり、その核たる文化・知識の実践者でもある古老である。アイヌの社会でも、文化を実践しようとしている人たちの頼りとされ、冗談等をいうことで皆を鼓舞したり和ませたりするのは古老であったりする。

5) アラスカ大学が専属古老(Elder-in-Residence)プログラムを採用したり、H氏のような方が頻繁に大学に出入りするような体制をとっていること背景には、このような人々による精神的なガイダンスを大学が重要視しているからである。バーンハートによれば、「全人教育」が先住民族の高等教育を特徴づける要素である。ハワイ大学を訪れたことがある筆者は、先住ハワイ人研究センターの教授が学生たちに、自分の家族の先祖たちが残したチャンツ⁵を覚えることを、学ばせる条件として課していることを教授から説明されたとき、先住民族の高等教育における精神性(Spirituality)の大切さを確認できた。アイヌの場合はカムイに対する信仰の念、それに伴う謙虚さや感謝の念の重要視がこれに相当するであろう。

6) どこの先住民族にとっても、言語は最も重要なものであるとともに、多くの場合は一番危機に瀕している側面でもある。バーンハートによると、先住民族の大学組織が中心となり復興運動を促進した場合、その象徴的なインパクトは先住民族の他の構成員による言語復興運動に、より一層強い影響を及ぼすことがしばしばある。

7) バーンハートによると、主流社会の日常や組織で一般的とされる知識のとらえ方を超えようとしている先住民族の教員や教育機関が最近注目しているのは、知識を構築、整理、使用するための先住民族の伝統的な知識体系(認知論、知識の使用方法)である。例えば、先住民族社会はしばしば文字より口承伝統を大事にしているが、これには、先住民族の価値観、精神性、態度も含まれる。

8) 筆者がH氏から学んだのと同じように、状況に組み込まれた体験的な学習が現在でも好まれる傾向にあるという。

9) SANSRDが取り組んでいるように、高校生に対する情報提供や入学後のフォロー、先住民族のための特別な建造物や部屋の設置による、学生たちが自分のままで居られる空間の提供が、初期の安心感や、物事に対し頑張って挑戦する勇気へとつながる、非常に重要な要素である。次節で触れる最近の札幌大学のウレシパ奨学生の取組みに関する研究が発表される予定と聞かすが、この観点からの情報が楽しみである。

10) 上記で見てきたように、地域参加型研究法を取り入れることにより、学生の調査と地域のニーズにあった研究が同時進行で可能となり、相互扶助的な状況が実現する。

また、2004～5年のアラスカ大学の私の指導教官が学校教員等の外部者のための、先住民族の文化への入門的経験として、先住民族の古老とブッシュで一週間を過ごすカルチャーキャンプも含め、アラスカのローカルな知を体系的に記録し、それを州の学校教育に還元するための大型研究プロジェクト（Alaska Rural Systemic Initiative = AKRSI、通称「アールシー」）の代表の一人として関わっていた。2005年に第二期の終わりに差し迫っていた。大学院生だった私はそれを通じて、アラスカ大学で指導教官が携わっていた教育プログラムの卒業生である私の先住民族出身の「先輩たち」にも出会えて、彼らと指導教官の接触の仕方や、やり取りをまじかで見ることができ、文献では絶対に知り得ることのできない知識を得ることができた。第4節でも触れるように、この経験は現在の私の教育的取組みの基礎となっている。

さて、いうまでもないが、このような先進的な取り組みは何十人の有能なリーダー、または多様な集団、期間の間の相互連携の他、州や国からの補助を必要とする場合がある。私個人の日本での教育的取組みとの関連でいえば、受け持っている学生たちに先住民族の地位向上のためにそれらが存在していることを知らせる程度に留まっている。

3. 日本の先住民族政策とアイヌ民族のための高等教育

それでは、日本のアイヌ民族に関する教育や、高等教育におけるアイヌ民族出身の子弟の支援制度はどのようなものになっているのだろうか。アイヌ民族に関する研究に携わっている学生たちに指導をしたり、実際に時々アイヌ出身の学生や研究者を相手にしている筆者が行っている教育・研究を読者が理解するために、これを説明しなければならないのである。

現在、体系的な「アイヌ研究」を行っているといえる日本の大学といえば、複数の分野の専門家がアイヌに焦点を当て研究に取り組んでいるという点でおそらく北海道大学のみである。逆にアイヌのみに特化した授業をアイヌ民族出身の学生にも提供していることを「アイヌ教育」と呼ぶのであれば、最も力を入れているのは札幌大学のウレシバ奨学生制度であり、毎年10人弱のアイヌ子弟が4年間アイヌの言葉、歴史と文化についてかなり集中的に学べる環境が整えられている。また、奨学金制度はそこまで整っていないが、駒澤大学苫小牧校はアイヌの子弟に対する熱心な教育支援で注目されている。アイヌ語やアイヌ文学の研究、および大学院レベルでの教育においては、分野は限られるが、千葉大学はアイヌ民族のアイヌ語活動家たちの中でも評判が高い。また、受講生が全員アイヌ民族出身の白老民族博物館主導の「担い手育成事業」は資格の取得にはつながらないが、学習の内容や地域との連携という面から、海外の先住民族の大学の取組みに匹敵するほど、レベルが高く、内容の濃いプログラムである。

さて、北海道大学に話を戻すと、アラスカ大学のように、アイヌに関係のある教育的事象についての体系的な研究を行ったり、アイヌ民族出身の大学院生の博士号取得につながるような支援システムを導入するなどして貢献することも可能であろう。そもそも北海道アイヌ社会の最大の代表組織である北海道ウタリ協会（現北海道アイヌ協会）が1988年に日本政府に提出し

た「アイヌ新法案」の正式要求において、教育に関連しては、①アイヌ子弟への総合的教育対策、②アイヌ子弟に対するアイヌ語学習計画、④大学教育におけるアイヌ語、アイヌ民族文化、アイヌ史の講座開設とアイヌ民族の人材の登用、およびアイヌ子弟の入学受講の特例措置の実施や⑤アイヌ語、アイヌ文化研究・維持を主目的とする国立研究所の設置とアイヌ民族研究者の参加を要求しているが、これらはどれも実現されていない。一方で2008年6月に衆参両院全員一致で「アイヌを日本の先住民族と認める決議案」が採択され、官房長官談話で日本の先住民族として認められた。これを受けて、翌年の9月にアイヌ政策に関する有識者の懇談会によって提出された最終報告書には、広義の意味としての文化伝承に向けた「民族共生の象徴となる空間」の設立と、北海道以南の地域のアイヌ民族の生活実態に関する調査とともに、「国際的先住民族理解に結びつく教育やアイヌ語を始めとした総合的なアイヌ民族学院のような象徴的な施設の設置」を提案しているが、これもまだ建設の段階に留まっているだけである。

そこで北海道大学に対しては、アイヌ民族の子弟のための優先枠をもうけることを切に望む。しかしながら先日北海道新聞に、北海道大学の文学研究科は近い将来にアイヌの歴史やアイヌ語を専門的に学べるシステムを開設するという記述の記事があったが、有識者懇談会に続くアイヌ政策推進会議の委員である佐々木利和北海道大学客員教授によると、委員会が審議したところ、国立大学におけるアイヌ子弟の入学の特例措置の実施は日本の教育基本法と反するために、実現不可能だと判断した、ということである⁶。

さらに最近の報道によると、近い将来に新たなアイヌ民族法が成立する見通しであるが、そこで記述された教育は福祉面の奨学金に限るものであり、国立大学におけるアイヌ子弟の入学受講の特例措置や民族教育は何も触れられていなかった。長年アイヌの民族的教育の課題と展望を検討してきた者として、「広義の意味での文化享受権」の一環として、是非これらの点の実現を見たいと思う。この考えが含意するものが私の演習の授業を受講する学部生に伝わるよう、世界中の先住民族の権利と持続可能性について教えている。

4. 私の教育的実践の内容

さて、筆者はアラスカ大学での教育を受けて、現在北海道大学でどのような教育を行っているか。この節では現在私が行っている研究も含め、私が行っている教育を広義の意味で捉えて、ゲーマン研究室に所属している大学院生向けの教育を主に扱う。学部レベルの演習の授業で先住民族の問題に特化した授業も行っているため、その中身も取りあげる。上記で説明したように、高等教育に限らず教育における先住民族の待遇は、先住民族自身の存在感にかかっていると考える。言い換えれば、先住民族学習のカリキュラム、教授法、場合によっては教育機関の管理運営にまで、先住民族の自己決定の権利が行使され、先住民族の視点から参画、参与ができれば、できるだけ良い。先住民族に関する異文化間理解教育においてはこの先住民族の権利（＝先住民族特有の人権）の視点は欠かせないものであり、先住民族関連の授業では必ず取り入れている。

一方で、研究者養成の面では、大学院レベルでは質的研究の授業や民族誌的研究を教えている。筆者が受け持っている大学院生の中には非言語コミュニケーションを含め、先住民族の文

化的特徴を配慮しなければならない事柄を研究の対象としている学生もいる。その意味において、筆者のゼミをできるだけ多様な人々が混ざり合う場所にしようとしており、また大学構内では民族的、思想的多様性が認められ、尊敬される環境に成るよう、努めている。質的研究法であるインタビューや参与観察研究では研究者自身が研究ツールに化するとされるが、なるべく多様な環境を提供することにより、異文化間コミュニケーションの機会を多くし、学生それぞれに己のコミュニケーションスタイルが見つめられる機会を多くしようとつとめている。特にゼミ生に関しては、先住民族の文化を実体験できるよう、アイヌのイベントへのフィールドワークの機会を多く提供し、また先住民族の価値観の一つである「サービス」（奉仕の精神）が身につけられるよう、ボランティアをするチャンスを逃さないようにしている。

筆者が現在まで担当してきた授業の中で、先住民族、先住民族教育学や異文化間理解を取り扱う、もしくは部分的でも取り上げる講義は以下のようなものである。

大学院事業

調査実験（いわゆる「ゼミ」）

特別演習 表象文化論

特別演習 先住民族教育論

大学院共通講義

2016年教育学院サマーインスティテュート事前準備授業

メディアコミュニケーション研究院特別教育プログラム「Tandem Language Learning Project」（部分担当）

北海道と沖縄から考える地方創生（部分担当）

学部レベルの授業

英語上級演習「Indigenous People's Rights and Sustainability」

英語中級演習「Indigenous Education」

英語中級演習「Alaska Through the Media」（15コマ中、5コマ分）

ESDキャンパスアジア、ESDキャンパスアジア・パシフィック（部分担当）

Multiculturalism in Japan（現代日本学プログラム、部分担当）

主題別科目「多文化現象と人権を考えようー日本編」（2017年度前期の予定）

第2節で述べたように、自分の行っている研究をなるべく受け持っている大学院生と共有したいと思っている。特に北海道大学に赴任してからの研究はアイヌ民族の人々にとって論争となる話題（北海道大学が所蔵しているアイヌ遺骨の扱い）であったり、実際にアイヌ民族の人々を調査員や助言者に採用したりする機会が多いため、これはなおさらのことである。筆者は北海道大学に赴任してからの5年間で、アイヌ語の伝承に関する一つの大型委託研究調査事業一件、メディア・コミュニケーション研究院の院内共同研究助成事業6件⁷、及び科研基盤Bの研究助成を受けた。2015年3月に道内三か所の国際地域研究会に修士課程の大学院生二人と研究生二人を連れて行ったほか、3月及び7月に札幌で開催した国際研究会にも彼らを参加させている。しかし、後述するように、学生たちを参加させるのに課題もある。また、良き学門の精神に従い、先住民族研究を行っている外部研究者が訪問する度、研究会等に院生たちを参加させている。

「マオリ研究者はなるべく多くのイベントに顔を出し、自分の応援の気持ちを表出すること

が大事」]とスミスが指摘しているように、また筆者自身がそうしてきたように、アイヌの人々とのラポールができるように、受け持っている大学院生をできるだけ多くのアイヌイベントに同行させている。上記の研究会等の他に、北海道各地で行われるアイヌの神事（カムイノミ、イチャルパ・シヌラッパ）、コンサート（二風谷のウレクレク、札幌のフンベシスターズ、アイヌ・アート・プロジェクト）、エコツアー（北大）、弁論大会、祭りや合宿に参加させてきた。嬉しいことに、以前から時々山に連れて行ってくれていたアイヌ民族の男性が研究室の学生たちにも山菜取りに同行する機会を与えてくれたり、学生たちが札幌の大きなアイヌの神事でボランティアをする機会に恵まれたりしている。先住民族に対する教育支援を研究したいということで受け入れた中国からの一年間の短期留学生を往復6時間かかる帯広の学習支援の会に、毎月1,2回連れて行った。また、教育学部の国際交流委員会のメンバーに無理をお願いして、平取町および日高町でESDキャンパス・アジアのフィールドワークに研究室の院生たちを参加させていただいたこともある。

なお、アイヌ民族の二人の女性主催の年2回の北大構内のエコツアーや、元大学院生主催の映画鑑賞会などは、ゼミ生だけではなく学部生にも知らせるようにしている。現在まで最大の学生参加数は2013年12月に開催したアイヌの遺骨に関する国際シンポジウムで、先住民族に関する授業の受講生の7割近くだった。

一方で、ゼミの方はその時々訪れる先住民研究者も含め、すべての人に門戸を開いており、現在受け持っている修士課程二人、博士課程一人と研究生一人に加え、2016年4月～12月まで調査のために北海道に滞在しており、自らもアイヌ出身である研究院研究員の女性一人、社会人のアイヌ研究者一人、そして博士課程の学生の0歳の娘が和気藹々と毎週参加している。2016年は6月20日から、10週間ほどアフリカ系コロンビア生まれのアメリカ人学部生をインターンとしてスタンフォード大学から受け入れた。

5. 課題、結び

以上、アラスカ大学で私が身につけた先住民族問題の理念に基づいた、筆者の教育実践の内容を述べてきた。現時点では大体において、その理念に忠実に従うことに成功しているように思う。少なくとも、北海道大学の構内がアイヌ的な要素にあふれていることは受け持っている大学院生との間に共通理解ができているだろう。15週間かかる学部生向けの授業では一度も講義の根本的ポイントに異論を申し出る学生がなかったことから、授業で教えようとしている要点が伝わったのではないかと考えている。また、受け持ったサーミ系スウェーデン人学部生、カミングアウトを決断した学生、受け持っている大学院生などには、「異文化に関していろいろと考えさせられて、先生に感謝しています」と言われた。なお、「学生のコミュニケーション様式を最優先するために、効率よさを犠牲にしているやり方に感動しました」とも言われた。

しかし、正直に申し上げると学部レベルにおいても大学院レベルにおいても理想まではほど遠いのが現実である。簡単な課題から述べれば、出身によって質的研究に対する態度にはきわめて大きな違いが見られる。マイノリティ出身のアメリカからの留学生は奉仕の精神にあふ

れていたのに対して、アジアの国からの留学生の中に、人生で外泊は一度もしたことがなかったため、アイヌの方の家に民泊することができなくなったこともあった。何度も事前注意をしたにも関わらず、イベントに遅刻する大学院生など、今後筆者の母校である九州大学の研究室出身のアジア系留学生との交流を通じて、状況が改善することを祈りたくなる。

他方で、先住民族問題の政治性のために、問題は山積している。毎日のように、この問題の取り扱いの難しさを認識する。短期的夏季プログラムに参加する留学生のコメントからは、先住民族問題の本質を捉えていないと思わせ、単なる僻地問題や多文化主義のもう一つの側面にしかとらえない安易さを感じる。また、筆者は論文等において、国連の先住民族権利宣言に掲げられている基準を自論とするため、そこまで主張しきれない学内の他の教員から煙たがられているかもしれない。問題の核心をついていない夏季プログラムに関して何も言えない状況を打破するのにいつまで時間がかかるかと思う一方、過激すぎる発言で自分の個人的研究を超過してしまい、受け持っている院生たちには悪影響はないかも心配である。あるいは、自ら異文化間理解教育を教えながらも、つい和人の基準に合わせている自分が、雄弁さや度胸に対して高い基準を持っているアイヌの人々のスタンダードに合わせられないことによる研究チームの中の安寧のなさ、研究協力に対しての謝金額に関する議論等のため、受け持っている学生たちを研究プロジェクトに入れさせるタイミングがなかなかつかめないことなどがあげられる。おそらく筆者が所属する教育学院も含め、学内の諸教員間にある一定のコンセンサスが形成されるまで、相当時間がかかるかもしれない。また、アイヌの皆さんとの関係性は、どの民族の人々とも同じように、失敗をしながら試行錯誤で進むしかないかもしれないとも思う。

いずれにせよ、多文化主義政策に関する知識はマイノリティの立場向上を左右し得るという意味で、重要である。これは一般の日本人の学部生教育にとっても、アイヌを専門としている大学院生にとってもそうであろう。「広義の意味での文化享受権」の中に、教育を通じて民族の社会発展が当然あるべきと筆者は思っている。政策方針を変えるために行動を起こすなら、この数年以内でなければならないという時間的制限もあるように思う。本稿を読む同僚の中に、この考え方に共感していただける人が一人でもいればと望みながら、本稿で述べた教育理念に従い、教育を続ける所存である。

謝辞

本研究はJSPS科研費26284135および平成28年度北海道大学メディア・コミュニケーション研究院共同研究助成金（多元文化教育の諸相）の助成を受けたものである。

注

- 1 一つ断っておかなければならないのは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの研究者である。おそらくアイヌの皆さんからの要求との付き合いの面において、私の何倍も忙しいのではと推測するし、彼・彼女らの献身ぶりに頭がさがる思いでいる。また、ご自身がアイヌ出身の研究者であったり、アイヌの存在をキャンパスに感じさせる上で大きく貢献していることは間違いない。但し、現在の大学による拘束のた

め、学生を受け持つことができないことが筆者との根本的な違いである。

- 2 たとえば、国連の先住民族権利宣言。
- 3 この面での基本的な課題の概説に、カステラノとブレイボイ（2012）が詳しい。
- 4 本稿では当事者たちのプライバシーを守るために全ての名前を匿名としている。
- 5 口承で家族に代々伝わる、特別なハワイ語のことば。
- 6 北海道民族学会定例発表会，2013年3月，北海道大学にて。佐々木教授の講義の後の質応答における発言。
- 7 分担者も含め。

参考文献

- Barnhardt, Ray. Higher Education in the Fourth World: Indigenous People Take Control. *Canadian Journal of Native Education*, Vol 18, No. 2, 1991. <http://ankn.uaf.edu/IEW/winhec/FourthWorld.html>からアクセス。
- Castellano, Angelina and Bryan Brayboy. Culturally Responsive Schooling for Indigenous Youth: A Review of the Literature, *Review of Educational Research*, Vol. 78, No. 4, 2008, pp. 941-993.
- ゲーマン, ジェフ 日本の先住民研究における外部研究者の関係性—フィールドワークにおける手続き的、倫理的課題をめぐって『国際教育文化研究』Vol.7, 2007年6月, pp. 145-156。
- Gayman, Jeffry Joseph『土着の知に基づいたアイヌ文化継承に関する研究—「カルチュラル・セーフティー」論を中心に—』博士論文 九州大学人間環境学府 教育システム専攻, 2012年。
- Kirkness, Virginia. J., & Barnhardt, Ray. First Nations and Higher Education: The Four R's - Respect, Relevance, Reciprocity, Responsibility. *Journal of American Indian Education*, Vol. 31, 1991.
- Smith, Linda Tuhiwai. *Decolonizing Methodologies*. London: Zed Books, Ltd. 1997.
- Trask, Haunani K. Settlers of Color and "Immigrant" Hegemony. *Amerasia Journal*, Vol. 26, No.2, 2000, pp. 1-24.

Content and Philosophy of My Teaching at Hokkaido University: Indigenous Education, Intercultural Understanding and Qualitative Research Amidst an Environment Imbued with Ainu Elements

Jeff GAYMAN

Key Words

Indigenous Studies, Indigenous Higher Education, Japan's Indigenous policies, Higher education for the Ainu people, Educational praxis

Abstract

This paper sets out to describe the author's educational undertakings as an Associate Professor serving in the School of Education and teaching content-based classes in English for general education programs for undergraduates at Hokkaido University, a tertiary institution located in the very center of Ainu country. While purportedly to do with the author's teaching at Hokkaido University, the mainstay of the article actually deals with the characteristics of tertiary education for Indigenous peoples, as summarized by Barnhardt (1992), and as experienced by the author during his Master's Degree coursework at the University of Alaska, Fairbanks, in 2004~2005. In short, tertiary education for Indigenous peoples tends to blur the boundaries between university and community by imbuing university education with traditional Indigenous knowledge and traditional Indigenous teaching practices, especially in the form of whole-person education under the tutelage of Elders, and through extensive community-based learning. It tends to be committed to the needs of the community, and can often center around community-participatory research approaches. Indigenous education at the tertiary level also often tends to seek to create a congenial environment for Indigenous students leaving the comfort of their families and communities for the first time. The author has striven to replicate such conditions amongst the students under his tutelage by inviting numerous Ainu guest teachers to speak at the university, by providing as many opportunities as possible for his graduate students to engage in fieldwork by attending local Ainu community events, and by providing a role model of himself doing service to the Ainu community. On the intercultural education front, he disseminates information as much as possible about public Ainu events to mainstream students, as well as by teaching students about the unique rights of Indigenous peoples as victims of processes of colonization and assimilation. The precarious state of current Ainu policy and possibilities for change via citizen activism are also touched upon.